

立ち読み版

しりパラ★

さわって揉んでボクのもの!



小説 三津谷鷹介
挿絵 古川れもん

プロローグ お尻フェチ、大いに語る

第一章 学園のお尻ハンター

第二章 傷心のお尻とバックオーライの初体験

第三章 大暴走！ お尻ガーディアンズ

第四章 お尻は誘う、魅惑のデート

第五章 遥かなる追憶のお尻は大人の香り

第六章 躍るお尻のパラダイス！

エピローグ お尻娘たちの憂鬱

006

007

035

075

112

152

195

249

登場人物紹介

Characters



いはら たまき 伊原 環

咲苑学園一年生。艶やかな黒髪の魅力的な、大人しそうな顔立ちの女の子。



おいさか あすみ 追坂 明澄

咲苑学園女子テニス部主将。姉御肌で部員から頼られており、部活を覗く結也を警戒している。



とのべ しほ 殿部 詩穂

学園の化学教諭。女生徒のお尻に執着する結也を更生させようと情熱を燃やしている。

いっしき ゆうや 一色 結也

咲苑学園の二年生で、「理想のお尻」を捜し求めるお尻フェチの少年。

（また、いかにも男受けのよさそうな、大人しい感じの子で……。いろいろなもつともらしいこと言ってた割には、あいつも意外と分かりやすい男だったってことかね）

疎ましがっていたはずの覗き魔が見知らぬ少女と一緒にいるのを見た瞬間、なぜか明澄の中に落ち着かない気持ちがあるぐると渦巻きながら湧き出てきた。

（……って、あ、あれ？ なに？ あたし、どうしたの？ 別にあいつが誰を追っかけ回したって、あたしには関係ないじゃない！）

整理のつかない気持ちを持って余したまま、明澄は二人の横を通り過ぎようとする。

無意識のうちに足を早めていた彼女は、すれ違った直後に結也が顔を上げて何事か声をかけようとしたことにも気がつかなかった。

不用意に上げられた相手のロブを、狙いすました場所に鋭く打ち返す。

対戦相手は三年生のレギュラーだったが、明澄のボレーはその彼女ですら反応できない速度でコートの隅を小さく抉って跳ねた。

「ゲームカウント3・1！ ゲームセット、追坂先輩の勝ちです！」

審判役の二年生が告げる。次にミニゲームでコートを使う二人と入れ替わりに、明澄たちは横のベンチに引き上げた。

「気合い入ってるね、追坂」

タオルで汗を拭きながら自分のボトルからドリンクを飲む明澄に、観戦していた副キャ

プテンの少女が話しかけてくる。

「あたしはいつだって気合い入れてるわよ。それが責任でもんでしょ。……なに？」

これまでずっと協力して部の運営に当たってきた彼女のわずかな語調の変化を感じ取って、明澄は先をうながした。

「うん。あのね、今日は何だか、ちよつと必要以上に力んでるような感じがするよ。いつもはもう少し力の入れ抜きがうまい気がしてたけど」

「そうかな。……ほら、最後の大会近いし。さすがにあたしでもどっか緊張してるところはあるのかもね」

「そう？ それだけならいいんだけど」

ためらいがちに口ごもる彼女が、自分でも認めたくない何かに感じているような気がして、明澄はやや焦りながら立ち上がった。

「そんなことより、そろそろコート空きそうだし、もう一本いこうか。相手お願い」

くせつ毛ショートヘアの中でずれたサンバイザーを直しながら位置につき、構える。

エースの明澄といえど、彼女とは実力が拮抗していて、油断できる相手ではなかった。普段なら、ラリーが始まると同時に雑念は消えてひたすら競技に専念できるし、そうで

なければいけないのだが。

（あたしが……力んでる？ イラついてる？ なんで？ あのバカの、あんなところを見ちゃったから？ あり得ないでしょ。それじゃまるで……）

その時に限っては、心の隅にチクチクと居座る違和感がどうしても消えてくれなかった。「くっ!!」

うまく逆サイドを突かれた一撃に、反応が微妙に遅れる。

追いつこうとむきになった瞬間、切り返しに耐えかねた左足がずるつと滑った。

(……まずい)

反射的にそう思った時、足首に激痛が走って明澄は崩れるようにコートの上に倒れこんでいた。

(女子テニスの追坂キャプテンが、昨日足首をねんざしたって)

(今年の大会に出るのはもう難しいみたいだよ)

何気なく聞こえてきた噂話に、最初結也は自分の耳を疑った。

「おい沢渡。お前、追坂先輩のケガの話、何か詳しいこと知ってるか？」

最近、昼休みは環のいる一年D組の教室に出かけて彼女とのコミュニケーション(ただし一方的な)に励むことが多いのだが、今日ばかりは宏志の机に近寄って情報収集に努めることにする。

にきび面の少年は、顔をしかめて悪友を見上げた。

「俺も詳しく知ってるわけじゃないけど、大会無理ってのはどうも本当らしい。お前、面識あるんだから、会いに行ってみりゃいいじゃないか」

「阿呆か。こんな話、直接本人に聞けるわけないだろ」

「……まあ、確かに」

明澄のクラブ活動に対する思い入れは、ずっと目の当たりにしてよく知っているだけに今の本人の気持ちを慮るおもんばかと部外者の結也ですら居たたまれなくなるほどだった。

（ああは言ってみたものの……）

放課後、結也は自分でも何のためなのかよく分からないままに女子テニス部キャプテンの姿を捜して校内をうろつき始めた。

三年生の教室をのぞき、そこで見あたらなかったのもでテニス部に顔を出し、そこにも居なかったのもで別の場所を捜そうときびすを返した時だった。

「ちよつと、君」

呼び止められて振り返ると、何度かとつちめられたことのある女子の副キャプテンが立っていた。

「追坂だったら、患部を冷やすのと、テーピングを交換する必要があるから、保健室に行けば見つかるともいれないわよ」

「……どうも、ありがとうございます。行ってみます」

意外なところからの情報提供に、戸惑いながらも礼を言うのと、副キャプテンは小さくため息をつけてから言葉を続けた。

「あの子、落ち込んでると思うから。ひよつとしたら、同じ部の私たちよりも、君のほう

がうまく慰めてあげられるかもしれない。会ってあげて」

(僕が？　なんでだろ)

言っていることの意味はよく分からなかったが、とりあえず結也はそのアドバイスに従うことにする。

はたして、校舎内に戻って保健室の扉を開けると、制服姿の明澄がベッドの上に座り、テーピングでぐるぐる巻きに固定された左足首にアイスパックを当てながらぼんやりしているのを見つけた。保健の教師は席を外しているようで、室内には彼女一人しかいない。

「……先輩。どうも」

扉を開ける音に顔を上げた明澄と目が合ってしまった、結也はおそろおそろ挨拶する。

「い、一色!! どうしたの、こんなところに。……って、あ、分かった。あれでしょ、あの髪の毛の子に強引に迫りすぎて引つかかれたとか」

意外なところへ突然現れた少年に、明澄はなぜかあたふたと慌てながら声をかけてきた。これまで、結也が彼女に会いに行くのは基本的にクラブ活動の時のスコートのお尻を鑑賞するためだったので、制服を着ているところを見る機会はあまりない。

上着を脱いだベスト姿に、さらにブラウスの袖を肘までまくり上げた活動的な着こなしが、ショートカットと日焼けした肌によくマッチしていた。

「なにわけの分からないこと言ってるんですか。違いますよ」

椅子を引っ張ってきてベッドの横に腰掛けながら、ついつい目は足首に向いてしまう。

少年の視線に気付いて、明澄は苦笑した。

「ああ、これね。……あたしとしたことが、間抜けなことやっちゃった。他の部員たちに偉そうなこと言えないよね、こんなんじゃ」

「いや、他の部員とかじゃなくて、先輩は……」

「あたし？ あたしはもちろん、最低の気分よ。自業自得とはいえ、最後の大会に出ることすらできないなんてね。……それに自分だけじゃなくて、部全体にもものすごい迷惑をかけちゃってるし。キャプテンとしてあり得ないわ」

副キャプテンの言っていた通り、いつもは元氣なテニス少女もさすがに相当落ち込んでいるようだった。

「で、結局、あんたは何のためにこんなところ来たわけ。先生なら職員会議よ」

「……ぼ、僕は……なんと言うか、先輩に会いに」

一瞬なんと答えようか迷った結也だったが、結局正直に言うことにする。

「あたしに……って、なに言い出すのよ。見れば分かるでしょ。あたしはしばらく、あなたの好きなウェアなんか着られないわよ？」

その言葉を聞いて、明澄は目を伏せた。珍しく、拗ねたような口調でぼそぼそと呟く。

「だってそうじゃない。あたしからテニス取ったら、ただのがさつな……」

「そ、そんなことはありませんっ！」

彼女の返事を耳にした瞬間、思わず結也は大声を出してしまった。

「いいですか先輩。お尻の魅力っていうのは別に服だけで決まるものじゃないんですよ。普段、自分で見られないからこそ、お尻にはその人のありのままが出るんです」

「……………」

思い入れを込めて語りだした彼を、ベッド上の少女は目を丸くして見つめている。

「今の先輩の気持ちを考えたら、バカなこと言ってるのは分かってますけど……それでも、いつもの格好いい先輩でいてくれれば、僕にとっては着てるものなんて関係ありません！」

「……ぶふっ。くくくくっ！」

せつかくの熱弁にもかかわらず、聞いていた明澄は小さく噴き出していた。

「くくっ。あ、ありがと。一応、あんたなりに慰めようとしてくれてるのは分かったわ」

まだ漏れる笑いを抑えつつ、目元に浮かんだ涙を指でぬぐいながら彼女は言う。

「あんたって本当、ヘラヘラした変態のくせに、妙に一本、筋だけは通っているところがあるわよね。……だからかな、なんとなく気になっちゃうのは」

「気に……って何がですか？」

「なんでもない！」

何かを吹っ切ったような口調できっぱりと明澄は言い、それからしばらくうつむいて黙り込んだ後、打って変わって挑発するような笑みを浮かべてみせた。

「ねえ、一色。さっきも言ったけど、あたし今、結構落ち込んでるし、部活出られなくて時間あるから。そこまで言うなら、うまく口説いてあたしを落としてみせなさい？」

「……え？」

これまでさんざん張り倒されてきた先輩からの意外な一言に一瞬あつげに取られた後、その意味を理解した結也は文字通り飛び上がって驚いた。

（落としてって……。まさか、先輩といい仲になれちゃうってこと？ あのお尻にあんなことやこんなことしたり、あとはその、さ、最後まで……！）

降って湧いたような思いもかけないチャンスに、ばたばたと意味もなく左右を見回し、両手を上下させて何事かをアピールしようとし、腕組みをして懸命に頭をひねった挙句、出てきた言葉は――。

「せ……先輩のお尻、触らせてくださいっ！」

「お前は、何があつてもそれしか言えんのかあ――っ!!」

「ぎゃっ」

飛んできた枕が顔面にクリーンヒットして、少年は椅子から転げ落ちた。

「……ふふっ。本当にもう、あたしつたらなんでこんな奴に……」

床にひっくり返つてもがくお尻バカを見下ろして、明澄は自嘲気味に笑う。それでもその表情は、先ほどまでに比べると確かに明るさを取り戻しているようだった。

「一色。ドア閉めて、誰も入ってこれないようにしてよ」

「！」

結也はがばっと起き上がると、こくこくうなずいて一瞬で扉に鍵をかけ、窓のカーテン

を引いて戻ってきた。

「……足首、痛めてるんだから。そこだけ気をつけて」

ベッドに上体を倒して横たわり、照れたように短い髪の毛を弄りながら言う女子テニス部のキャプテンは、コートの上で見せる雄姿からは想像もできないほど艶かしく、年上の女性らしい色気をまとっていた。

「は、はいっ!」

(えっと、どこからどうすれば……。いきなりスカートめくったりしたら怒られるかな? 最初は、その、き、キスからとか……。?)

返事だけはいいものの、夢にまで見た憧れのお尻をいざ自由にできるとなると、どこから手をつけていいか分からず、ベッドによじ登って両手を掴みかかるような形に構えたまま結也は固まってしまう。ベストを脱いでブラウスのボタンを外そうとしていた明澄は、いつもは必要以上に凶々しい少年のそんな様子を見ると苦笑いして声をかけた。

「いいよ、焦んなくて。やっぱりお尻がいいの? スカート脱ごうか?」

「はい……すみません」

ちよつとテンションが下がってしまった様子の結也に、明澄は優しく続ける。

「一応言つとくと、あたし別に初めてつてわけじゃないから、緊張しないで。……それとも、がっかりした?」

「そんなことはありません!」

結也は本心から即答する。そもそも成熟した、大きなお尻が好きなのだから、むしろこれまで気に入った相手は処女でない（推定含む）率のほうが高かったくらいなのだ。

実際、ホックを外したスカートを脱ぎ捨て、胸元をだけさせたブラウスとショーツのしどけない姿になった明澄を前にしているだけで、ズボンに閉じ込められたままの牡竿は内心の興奮を反映して痛いほどに勃起していた。

（追坂先輩の、お尻！ スパッツとかショーツパンツもよかったけど、やっぱり、こんな薄い下着一枚だけのエロさにはかなわないな！ 先輩の匂いがして、体温まで感じられるみたいで……）

「あのっ、先輩！ できれば、その、うつ伏せになって、お尻を上げた姿勢になってもらえると……」

「な、何よそれ？ ……まあ、いいけど。あんまり変なこと、しないでよ……？」
普段の強気な態度とは裏腹に、いざ二人で睦み始めると、明澄は意外なほど従順に結也のわがままに付き合ってくれた。

足元に座る少年の前でもぞもぞと身体を返し、膝を立ててお尻を高く突き上げる。

結也の目の前に、飾り気のないシンプルなショーツに包まれた引き締まったお尻がせり上がってきた。

ほとんど感動に打ち震えながら、彼はわずかに汗ばんでしっとりとした瑞々しい肌になつぷりと弾力あるお尻が詰まった二つの半球を眺め回す。なんとなく、触ってしまうの

がもつたと思われ、手を伸ばすこともできなかつた。

「ちよ……ちよつと。恥ずかしいじゃない。脚が太いの、自分でも気にしてるんだから。そんなにじろじろ見ないでよ」

すぐには手を出してこない結也に、何を誤解したのか明澄が首を後ろに曲げて文句を言う。その頬は赤く染まって、本当に恥じらっているようだった。

「なに言ってるんですか。こんなに形がよくって、お肌もきれいで、むちむちしてるのにきゅつと締まったお尻とつながってるおみ足なんですよ。このくらいでちよつといいんです。だいたい、先輩はアスリートなんですから。鍛えているからこそ、こんなに魅力的な身体なんじゃないですか。そのどこがいけないんですか」

言いながら、結也は思わず両手で目の前のお尻をさわさわと撫で回し始めてしまった。

「……っひゃん！」

不意に始まった素肌への愛撫に、明澄は目をつぶってびくりと震える。唇から漏れた声は思いがけず高く、艶めいていて、耳にした結也の鼓動はバクバクと高鳴りだした。

(先輩も……やつぱり、女の子なんだ。エッチな刺激をされると、感じちゃって、可愛い声を上げて……)

その声に誘われるように、大切な部分が薄布で隠された肌に触れる指に力がこもる。身体を折り曲げているために引き伸ばされたお尻のお肉はいつもより張りが高まっていて、快い反発力で指先に抵抗してきた。

(これが、先輩のお尻の生の感覚……！)

掌に伝わる肌の感触は、さらさらと滑らかで、わずかに熱を帯びている。

思いきって五本の指を広げて両側から抱える形でお尻全体を掴み、もにもにとほぐすように揉み込むと、

「あ……、んあつ……！ やっぱり、こいつの指っ……！」

明澄は少しの間、身体を強張らせて刺激に耐えようとしたものの、やがて小さな喘ぎ声をこぼして、色っぽく突き上げたままのお尻をくなくと左右に振り動かし始めた。その動きは、結也の手から逃れようとしているようにも、また逆に指から与えられる快楽に自然に揺れてしまっているようにも見てとれる。

「お、お腹に、響くみたい……。あ、今、ぞくつて！ ぞくつてきた！」

執拗にお尻の熟れ具合を楽しみ続ける結也の指戯に、アスリート少女は声を抑えられなくなっていた。強めに力を込めると美しいカーブを描いた背すじがビクッと震え、柔らかな力で優しくバイブレーションを加えるとベッドについた両肘に顔を埋めてまるで幼児がいよいよやをするように首を横に振りたくる。

「は……はあ……。だめえ……腰、抜けちゃうよお……んんっ！」

わずかに聞こえる声はどんどん甘さを増して、それと呼応するようにショーツの谷底の部分には汗ではない湿気がしつとりと含まれ始めていた。

(あの、追坂先輩が、こんなにエロい声で喘ぐなんて……)

美果の感触は徐々に深く柔らかく指先が沈むようになってきていて、体験のない結也でも目の前の少女の身体がすっかり男を受け入れる準備を整えていることが分かってしまう。彼自身も、股間の勃起がズボン突き破りそうなほどに熱く強張っていて、もうこれ以上触っているだけで満足することなどできそうになかった。

「せ、先輩の、ぜんぶ……。僕に、見せてください！」

かすれた声で囁く結也の言葉に、明澄はふっふっと乱れた息をつきながらも目と唇を固く閉ざして答えない。

ただ、朱を散らしたままふるふる震える頬は少女の内心の緊張と覚悟と、それからわずかな期待までも表しているようで、自分の前に捧げるように突き出されたお尻をこのまま思うように堪能していいのだと、そう許しが得られたと解釈する。

結也は、薄く伸びて大きな肉丘を覆う布地にそっと指をかけると、熟した果物の皮を剥くように慎重に下ろしていった。

大きく張り出した部分を抜けると、あとは生地自体の伸縮性で一息にするつと下まで脱げてしまう。同時に、明澄の隠れていた女の部分が露あはれになって、むわっと立ち上るフェロモンの匂いが少年の鼻を刺激した。

（は、はじめて……。見た。女の子の、あそこ……）

四つん這いになった少女の秘所を、後ろからがんで覗き込む姿勢になった結也は、そこから目が離せなくなっていた。



「じゃあ、環ちゃん。身体の、力を抜いて……」

天を突いてそそり立つそれを苦勞して押し下げ、先端を彼女のお尻の谷間に合わせようとしたりした時だった。

「あ、あのっ！ 結也さんっ！」

慌てたように環が振り向き、そして少年の股間の中心で赤黒く力をみなぎらせているものを目にする、また真っ赤になって前を向いてしまった。

「……どしたの？ やっぱ怖い？」

一人であたふたとしているその様子に、やや呆氣に取られた結也が尋ねると、少女は前を向いたまま小さな声で答える。

「い、いえ……。確かに、ちょっと不安もありますけど。結也さんだったら、わたし、大丈夫です。でも、あの……」

彼女はそこで、もう一度振り返った。

今にも自分を貫きそうな極太の肉槍はなるべく視界に入れないように、少年の顔だけを見て訴える。

「初めては、結也さんの顔を見ながら、してほしいんです。……ダメですか？」

初体験から、動物のように四つん這いで後ろから挿入されるのは嫌だと言うのだった。

結也としては、自分の腰でお尻の感触を楽しみつつ、その中心に自分の分身を差し込むようなバックスタイルこそが至高の体位なのだが、彼女の気持ちも理解できないわけでは

ない。

自分の欲望にブレイキの利かない部分はあるものの、基本的には人がよくて、特にきれいなお尻の女の子には優しくしたいと考えている少年は、特にためらうこともなくあっさりとうなずいた。

(この立派なお尻を見ながらエッチできないのは残念だけど、まあこれ一回つてわけでもないし。環ちゃんがそう望むんなら、最初は普通にしたらって特に問題ないよね)

改めて、お互いに全裸で向かい合う。

結也の下で、迫力のおっぱいを抱えるように隠して目を閉じ、全身の肌を桃色に上気させる処女の恥じらいが初々しかった。

「これでいい？ 環ちゃん。優しくするから……」

お尻と同様、透けるように白くむっちりとした柔らかい腿を抱えて開かせ、間に身体を割り込ませると、不安そうにうつつすらと目を開いた少女が、それでも健気に微笑みながら両腕を伸ばして少年の首筋に巻いてきた。

露わになった乳首は、色白の彼女らしく紅色はそれほど濃くないものの、ぷくりと膨らんで固く乳暈から突き出し、その存在を主張している。

お尻のかわりのように、その蕾が震える二つの白く豊かな丘を自分の胸で押し潰しながら、結也は自分の肉竿を少女の濡れた中心にあてがった。

(前からだと、たぶんこの辺で……)

膨れ上がった先端をぬちつと粘つく谷間に割り込ませ、その底の小さな膣口を探り当てる。両手で環の、細いが柔らかい背中を抱きしめて二人の身体を密着させ、ぐつと腰を押し進めて思いきって結合の時を迎えようとした。

したのだが。

(あ、あれ……?)

彼の牡竿は、前……彼女の身体の奥に、進んで行ってくれなかった。

(場所が、間違ってるのかな?)

とも思ったが、そうではない。龟头は確かに膣口を捉えているのに、くいっと腰をしゃくつても肉棒は妙な形に仕なるばかりで、少女の狭い秘壺の入り口を突破できないでいるのだった。

あまり力を入れすぎるとペニスが膣どころか肉唇からもぼろりと外れてしまいそうで、結也の内心はそれまで感じたことのない焦りに満たされた。

(しっかりとしろ、僕。環ちゃんの身体はこんなに柔らかくて気持ちよくて、彼女だって不安がりながらも僕に初めてをくれようとしているんじゃないか……!)

そうは思いながらも、股間の肉竿は確かに勃ってはいるものの、微妙に芯の入り方が甘い感じで自分の身体との一体感のようなものがない。

入り口でもたついているうちに、経験のない彼女でもおかしいと思ったのだろう、それまで覚悟を決めたように潤む瞳で結也の顔を見上げていた環が心細い表情になって彼の目

を覗き込んできた。

「あの、結也さん。私の身体、どこがおかしいですか……？」

不安げなその声に、少年の胸は締めつけられる。健気で可愛らしい後輩の初体験に嫌な思い出を残すことなど、なけなしのプライドにかけて許せることではなかった。

「……大丈夫、僕もちよつと緊張してるのかな」

囁き返しながら、結也は自分のフェチ魂をフル稼働させて自分の興奮を高める術を探っている。

(どうすればいい？ どうすれば、ちゃんと彼女と一つになれる？)

この姿勢のまま、彼女と顔を合わせたまま、同時にあの真つ白くふつくらと膨らんでもちもちの手触りを感じさせてくれるお尻の感覚を味わうことさえできれば――。

そう思った時、天啓のように彼の脳裏にその姿勢が閃いた。

(こ、これだっ！)

途端に立ち直った尻フェチ少年は、さっそく動きだす。

環の背に回した両腕に力を込めて、彼女もろとも上体を起こそうとし始めたのだ。

「あ、あの……結也さん？」

戸惑う少女を抱きしめたまま、脚をもぞもぞとマットの上で動かして膝を開く。環が気づくと、あぐらのように広げた男の両脚の中にすっぽりと肢体を抱え込まれた形で向かい合って座っていた。

「こ、これって……ひゃうっ！」

片手で背中を支えたまま、もう片方の手で尻を思いきつてもにゅっと掴む。

もみ、もにゅ、ふにゅう……

「あんっ！ ……あ、あの、そこはもう……っ！」

不安定な姿勢で愛撫される感触に、環は思わず悲鳴とも嬌声ともつかない声を上げてぎゅっと少年の首にしがみついてくる。それをいいことに、結也はそれまで背中を支えていたもう片方の手すら離して両掌で彼女のむっちりヒップを責め立て始めた。

「はあん、んくっ！ ……あ、あの、ええっ？」

半ば困惑しながらも甘い喘ぎを上げていた環の声に、まぎれもない驚きの色が混じる。それもそのはずで、対面座位に姿勢を変えて彼女のお尻を触り始めた途端、少女の秘裂に浅く潜り込んだままだった肉竿に、自分でもびっくりするほど力がみなぎってきたのだ。

（よし、これなら絶対大丈夫！）

さつきまでの焦りはもう微塵もなく、結也は環の小柄だが肉感的な肢体をもう一度しっかりと抱きしめ直して耳元で囁いた。

「環ちゃん。力、抜いてね。怖くないから……」

そのまま背中とお尻を押さえながら、ゆっくりりと腰を上にしやくる。少女のお尻の感触に固く膨れ上がった亀頭が、膣口をくぐり抜けてその先の急激に窄まった部分を強引に押し広げながらぬるりと奥へ滑り込んでいく感覚があった。

「ふ、くうんっ……!!」

固く閉じた脛の端にうっすらと涙を浮かべながら、環が両腕に力を込める。結也の腰を巻くように曲げられていた両脚もきゅっと幅を狭めて、二人の身体は性器同士でびったりと一つに結びついていた。

(挿入^{はい}った……。これが、環ちゃんの膣内^{なか}……。!!)

純潔を捧げる痛みが強張る少女の身体を両手で支えながら、結也はそり立つ股間の肉柱をぬっちり取り巻く処女の媚粘膜の熱と柔らかさ、そしてきつい締めつけを存分に味わっている。

あわせて、お尻を支えている方の掌ではやわやわと微妙に愛撫を続けているのがこの少年らしかった。たつぷりした柔肉を弄ぶと、それと連動するように濡れた無数の褻がひくひくと竿の肌に張りついては微妙な震動を伝えてきて、それがたまらなく気持ちいい。

(まだ力が抜けないってことは、痛いんだろうな……)

それでも、結也は初めて男のその部分を胎内に迎え入れた少女の苦痛を慮って、ゆったりとした呼吸を繰り返しながら抱き合つたままじっとしていた。

やがて彼の首に巻きつけていた腕をおずおずと緩めた環が、涙の滴を目の端に浮かべたまま精一杯幸せそうに微笑みかけてくる。

「結也さん、わたしならもう、大丈夫ですから。わたしの身体で、気持ちよくなってください……」

「……言ったでしよ、環ちゃん。二人で一緒に気持ちよくなろうって」

言うと、結也はゆつくりと腰を揺らすように動かし始めた。

「あ……うんっ……!!」

破瓜の痛みにまだすぎずきと疼く敏感な粘膜の中で熱い剛直が動きだす感触に少女は思わず声を上げたが、ピストン運動ではなく微妙に円を描くような動きなので刺激はそれほどでもない。

「しっかりと捕まってるね。僕はこっちに集中するから」

「え……あひゃあんっ!」

再び、環の口から驚きの声が漏れる。お尻マニアの少年は、座位で少女を貫いたままの不安定な姿勢にもかかわらず、背中を支えていた片手も離して両手で脚の中に抱え込んだ真っ白く丸い肉房をもにもにと可愛がる動きに熱中し始めたのだ。

「ゆ、結也さんっ! あの、困りま……ふうんっ!」

戸惑いながらも少年の言葉通り彼の首に巻いた腕に力を入れる環だったが、直後に思わず唇から濡れた声が溢れ出してしまうのを抑えられなかった。

身体を安定させようと両手両脚でしっかりと結也の身体にしがみつこうとすると、股間の恥ずかしい部分も彼の腰に押し当てるような形になって、自分を貫いた熱い柱が奥までめり込んでくるのを感じたからだ。

自分から胎内の一番奥の壁を突いてほしいとおねだりしているみたいなのはしたくない気持

ちになって、うぶな少女は真っ赤になつた顔を見られまいと少年の肩に頬を擦りつける。

ひたすら淫らなマッサージを続けられているお尻の底からは絶え間なくくすぐったいような、気持ちいいような弱い電気が流され続けているようで、その感触も彼女の腰に響く重い痛みを微妙に違うものに移し変えつつあるのだった。

環の動きにやや余裕が出てきたのを感じて、初めは小さく揺するようだった結也の腰の動きはだんだんと大きく、大胆なものに変わっていった。

お尻を抱えた両掌と合わせて、円を描いて揺するだけではなく、前後にグラインドさせるような動きも織り交ぜていく。

うっすらと血を滲ませた柔らかい少女の秘裂では、食い込んだ肉竿が少しずつその側面を見せては再び粘膜を巻き込んで内側に突き込まれる動きが繰り返されていた。

その部分だけ見ると痛々しささえ感じさせる処女の初体験だったが、

「んふうん……っ！ 結也さん、ゆうやさん……っ！」

少女は、いつの間にか艶やかな長い黒髪に彩られたその童顔を恋する少年と結ばれた喜びに蕩かせてふっくらした桜色の唇から絶え間なくはしたない声を上げ続け、むちむちと成熟した肢体のすべてを悦楽のピンク色に染め上げていた。

（くっ……。環ちゃん……感じてくれてるみたいだけ……。やっぱりキツいっ！）

初体験のせいとか、小柄な体格のせいもあるのか、環の秘所は結也の分身をぎゅっと挟み込んで、動かすのも楽ではないくらいだった。明澄のあそこが締めつけと襲の柔らかさを

併せ持つてペニスを気持ちよく扱といてくれたのに比べると、快感という点ではやや単調だったが、少女の初めてを確かに自分の肉槍で貫いているという実感がたまらない。

さらに、初体験ながら悦楽に喘ぐ環の身体は、早くもじわじわと秘洞に蜜を滲ませて、男の動きを助け始めていた。

「環ちゃん、いいよ、君のお尻もおま〇こも、すつごく気持ちいいっ！」

結也も夢中になって少女の手触りのいいお尻を揉みながら、ぐちゅぐちゅと湿った音を立てて熱い勃起を肉壺に出入りさせる動きを止められなくなっている。

後背位と違ってお尻の形を直接目にすることはできず、その柔らかさをぱんぱんと自分の股間に叩きつける独特の快感を味わうこともできないが、慣れてくるとこの体位もなかなか味わい深いものがあると彼は感じていた。

少女の体重を自分の肉竿と両手で受け止め、支える形になっているので常に深い挿入感を得られていたし、掌の上で快い重みとともに尻肉がむにゅりと潰れる感触は、彼女の魅惑的なヒップのすべてを手中に納めているという充実感を味わわせてくれる。

目に見えない分、かえって触覚が鋭敏になっているようで、十本の指のうち、どの指をどのくらい曲げたかで環の反応がどう違う、なんていうことまで分かるようだった。

固く反り返って秘孔を突き抜く勃起肉槍と、むっちりと重い柔肉の奥に秘められた悦楽の細い神経を弦のように弾く巧みな指技で、結也はお淑やかな黒髪の少女の身体を楽器のように奏で、あられもない声を上げさせる。

ちゅぷちゅぷと浅く出し入れしてから、どすん！ と奥まで剛直の先端を届かせると、
「ふあっ、んはああんっ！」

少女はたおやかな織手を男の首にかけてまま、背すじを反らせ、あごをのけぞらせて全身で快感を表現した。

その拍子に、結也の目の前で柔らかくも張りのある二つのおっぱいがぶるんと大きく弾み、固くしこった乳首の先からきらめく汗の滴を飛び散らせる。女性の胸にはそれまでほとんど関心を持たなかった彼ですら、そのポリウム感溢れる躍動には興奮をかき立てられずにはいられなかったほどだ。

「こんな風におっぱいをゆさゆさ揺らして……乳首も固くしちゃって……初めてなのに、いっぱい感じてるんだね！ 嬉しいよっ！」

指の間からお尻の柔らかい肉がむにゅりとはみ出すほど強く握りしめ、もう一度強く、奥深くまで肉槍を挿入する。

「はあんっ！ つ、強すぎますうっ！ 結也さんっ！」

言葉だけでは拒んでいるようでも、だらしなく緩んだ唇から甘くかすれた声で言っているようでは少女の本心は丸分かりだ。

結也もまったくためらう様子もなく、十本の指を柔丘に食い込ませたままばちゅんぱちゅんと結合部から滴が飛び散るほどの激しさで環の小柄な身体を上下させる。

亀頭から竿の根本近くまでじりじりとした熱が溜まってきていて、弾ける時が近づいて

いる実感があった。

「たっ、環ちゃんっ！ 僕っ、そろそろ、限界……いきそうっ！」

座った姿勢で向かい合い、薄暗いホテルの照明とはいえ明かりの下で恥ずかしい部分まですべてさらけ出して少年のペニスを受け入れ、それどころか自分から腰を擦りつけて初めての肉悦に酔う少女は、その言葉を聞いても結合を解こうとはしなかった。

「結也さん、わたし、わたしも……もう、おかしく、なっちゃいそう……なにか、あそこから、上ってくるみたいでっ……破裂しちゃうそうでっ！」

くいくいと男のモノを自ら迎え入れ、快感を与えようとするかのように環の腰が淫らにうねる。両足は男の背中で絡められ、仮に結也が離れようとしても離れられないほどしっかりと力が込められていた。

「環ちゃん……僕っ、君のっ、中に……！」

ぬちっ、ぬちっ、ぬちっ、という粘膜を擦り合わせる湿った音が、より大きく、濁った響きでベッドの上に溢れ出す。

白いお餅のような少女のお尻が結也の股間でぷりぷりと弾み、形を変えていた。

初体験にして秘所だけでなく、柔らかいその双球を男の指で揉み込まれる快楽まで味わってしまった環が、感じる部分を触ってほしいとはしたくないおねだりを繰り返す。

「お尻をぎゅってして、結也さんっ！ 結也さんの精液、わたしの中に出してえっ！」
「……くうう——っ！」



（ダメだった！ 今の僕には、詩穂姉ちゃんとの約束が……！！）

そう思い出して、自制しようとした時。

今度は、二つのお尻が上下に重なってにゅつと姿を現した。

むっちりとした丸い制服ヒップの上に、きゅつと締まったスポーティなヒップ。

そんな美尻の競演を見た瞬間、結也がそれまで意志の力で意識の奥底に抑え込んでいた欲望が弾け飛んだ。

「くう——っ!!」

まるで美女の血に飢えた吸血鬼さながらに、呻き声を上げながらまた室内に消えたお尻を追ってふらふらと用具室の中に踏み込んでいく。

跳び箱やスコアボード、ボール類の籠などがごちゃごちゃと詰め込まれた室内には、彼が予想した通りの二人、テニスウェアの明澄と制服姿の環が微笑んでいた。

「やっぱり、あのお尻は……って、そうじゃなくて！ 二人とも、なんでこんな……？」戸惑ったように言う少年に奇妙な笑顔を浮かべたまま近づいて、明澄はおもむろにその身体を床に敷かれた体操用のマットの上に押し倒した。

「ちよ、ちよっと！」

さらに、突然のことに慌てる結也の両手首を、後ろ手に縄跳びの縄でぐるぐると縛ってしまう。その間に、環は扉を締めて内側から鍵をかけていた。

（こ、この状況って……？）

これまで、女の子を追っかけ回して翻弄したことはあっても、翻弄される経験はあまりなかった元変態少年は呆気にとられたまま状況の変化についていけないでいる。

「……ねえ結也。今のあんたって、なんだか無理してるみたいで、ちよつと見てられないんだ、あたしたち」

「だから、これからわたしたちで、本来の結也さんを思い出させてあげます」

ジャージ姿でマットに寝っ転がったままの少年の横に立ち、二人の少女は意味ありげに顔を見合わせてから、結也を見下ろして告げた。そのまま明澄はしゃがみ込むと、彼のズボンをずるりと膝あたりまで下ろしてしまう。

「な、なにするんですか、明澄さん！ エッチ！」

「あんたが言うか」

楽しそうに結也の抗議を聞き流すと、テニスウェア姿の美少女はくるりと背を向けた。

「……結也さん、ごめんなさい……」

続けて環も同じようにかがんで、今度はトランクスの前のボタンを外す。

「し、失礼します……」

そのまま後輩も長い黒髪の流れる背を向けると、まるで小用を足すような姿勢でしゃがみ込んだ二人の美少女は同時にぱさりとスカートをたくし上げた。

「……………!!」

横たわった自分の股間を挟んで、向かって右手には白いスパッツ型のインナーに包まれ

た、女子テニス部キャプテンの大きいながらもきゅっと弾むような引き締まったお尻。左手には、小さな身体には不釣り合いなほどむっちり成熟して、黒いタイツ越しにうっすらと透けて見える可愛らしいショーツがかえってエロティックな大人しい後輩のお尻。

二つの美尻、四つの豊丘が、結也のペニスを中心に、今にも尻相撲でも始めようかという勢いで向かい合っているのだった。

目の前に現れた絶景に、結也は自分自身に課した誓約も忘れて思わずごくりと唾を飲み込んでしまう。

「……結也さん。結也さんは、本当に自分のお尻好きを捨ててしまったんですか？」

「あいにくだけど、あたしたちにはそんなのは信じられないの。もし本気だつて言うんなら、今から二人でたっぷりサービスしてあげるから、それを我慢してみなさいよ」

言うなり、明澄と環は互いのヒップを結也の腰の上に落として、そのままきゅっと後ろに突き出した。

(……な、なにこれえっ!?)

一応、結也もずっと黙ってされるがままになっていたわけではない。一時の驚きから覚めた後は、もぞもぞと両手をもがかせて縄が解けないか試していたし、身体を起こして逃げ出そうともしてみた。

が、少女二人がスカートの下の魅力の柔球をさらけ出して、その企みを本格的に始動させたあたりからは、もうそんな意志を保つことも困難になってしまっている。

自分の左右の腰骨に乗った二人分のお尻が、ふにふにと互いに押し合い、形を変えながら股間に柔らかくてたまらなく心地よい刺激を伝えてきて、まともに思考することもできないくらいだった。

「ふ、二人ともっ！ ちょっと、こんなことされちゃったらっ……！」

あつと言う間に、結也の股間の肉茎に全身の血液が音を立てて流れ込む。

灼けた鉄柱の温度と硬度になったそれは、環の手によって開放されていたトランクスの前から弾け出し、もぞもぞと自分を閉じ込める柔らかい肌の壁を突き回しながら膨張していつ、鬱血するほどに腫れ上がった先端を二つのお尻の間からにゅっと覗かせた。

「あんっ！ 固いっ！」

「きゃっ！ 熱い……ですっ……！」

お尻の谷間で牡竿の猛り立った感触を確認して、少女たちは口々に喜びの声を上げた。

「どう、結也。あたしたちのお尻だって、『お姉ちゃん』のに負けちゃいけないでしょ？」

「わたしたち、もつと頑張りますから。もつと大きくしちやっつけてくださいっ！」

二人は言うのと、いつそう積極的にもむにむにとお尻を押しつけ合う。左右で微妙に違うリズムと感触で弾むお肉がペニスを挟んで抜き、新鮮な快感を腰まで響かせた。

（す、すごいっ……。気持ちよすぎて、気が遠くなりそうっ！）

結也はもう、そこから感じられる熱さと柔らかさ以外は何も感じ取れなくなっていた。横たわったままあごをのけざらせ、口を半開きにしてあうあうと喘ぐことしかできない。

しかし、彼がその快樂に完全に溺れてしまいそうになった、その瞬間だった。

「……ちよつとつ！ あなたたち、何をしているのっ！」

締めきられたはずの引き戸をがらりと開け、鍵を手にした詩穂がずんずんと用具室の中に踏み込んでくる。その声を聞いた瞬間、わずかに結也の頭の中が冷えた気がした。

「一色君がいつまで待っても帰ってもこないから、探しに来てみれば！ こ、こんな破廉恥な真似……許しませんよ！」

「そ、そうだよ、二人とも……。離れてよ……」

今にも飲み込まれてしまいそうな肉悦に抗つて、ようやくこのことで結也も言う。

しかし、女教師と少年にたしなめられても、少女二人はその可愛らしいお尻のエッチな動きを止めようとはしなかった。

「結也！ あたしは……あたしは、相手が誰でも、何があっても変わらない、そんなあなたが好きだったの！ でも、あなたのお尻好きは、たった一つのお尻で満足しちゃうような、それだけで自分を曲げてしまえるような……そんな簡単なものだったの!!」

細いウエストからぷるんと張り出し、インナーに締めつけられてわずかに小さくなって弾力を増したお尻で肉棒をきゅつきゅつと挟みつけながら、テニスウェア姿のスポーツ少女が言う。

「あ、明澄さん……」

今まで、身体の関係はあったものの、仲のいい喧嘩友達のような間柄だと思っていた元

気な上級生からの告白を受けて、結也の声に戸惑いが交じった。

「結也さん。わたしは、いつでも自分に正直で、周りの目も言葉も気にしないでやりたいことを押し通す結也さんをすごいって思っていました。……でも、今の結也さんは、自分自身を何かにすっぱり押し込めようとしているみたいで、そんな嘘つきな結也さんには全然憧れられません！」

ふつくとマシユマロのように膨らんだお尻を黒いタイツで覆い、ツルツルザラザラした独特の肌触りとその奥の柔らかい感触の二段構えで幹を上下にシュツシュツと擦りつけながら、制服姿の控えめ少女も懸命に訴える。

「……環ちゃんも」

呆然と少女たちの声を聞きながら、再びびりびりと痺れるような悦楽に結也の固く勃起上がった肉槍がびくんびくん震えだした。

（ま、まずいっ！ ちんぽを擦る感触も、挟み込んでくる柔らかさも、そして目の前で二つのお尻が押し合って動くエロ可愛らしさも……何もかも我慢できそうにないっ！）

単純にペニスに与えられている刺激だけでも我を忘れて自分も腰を動かしそうなほどの気持ちよさだというのに、その上に、

（明澄さん、環ちゃん……。こんなに魅力的な女の子二人が、僕のために、まあるいお尻を出して一所懸命ぶりぶり動かしてくれるなんて……！）

彼女たちの想いを受け止めて、一層快感が増幅される。

(僕は……)

二つのくねるお尻を乗せたまま、結也の腰ががくがく上下し始めた。

「……ユウ君っ!?!」

少年の太い肉竿が、自分の意思をもって二つの柔尻の間をぬちぬちと出入りし始めたのを目ざとく見て取って、詩穂は焦った声で彼の名を呼ぶ。

(僕は……!?!)

「あんっ! 結也さんの、おつきくなりましたっ!」

「やだっ!?! ちよつと、そんな急にそこを擦っちゃ……!」

ずどんと下から突き上げられ、太さと固さを増した剛直でデリケートな谷間の内側をぞりぞりつと擦られて、それまで主導権を握っていた環と明澄も思わず声を上げた。

それにも構わず、結也は強くいくいと腰をしゃくると、股間に溜まった熱気に意識を集中する。手は使えないが、向かい合った美尻同士がひしゃげるほどに押し合わされたその締めつけは十分で、肉茎を炙る熱を解放するのに何の苦労もいらなかった。

「僕はっ! やっぱりっ! みんなの、可愛いお尻が大好きなんだああ——っ!!」

「あひやあああんっ! 熱いっ! 環ちゃん、そんなに押しつけないでえっ!」

「ゆ、結也さん! うれしいですうっ! いっぱい出してええっ!!」

どびゅうううううう——っ!!

背中がえびぞるほど、ひとときわ強く腰を突き上げながら絶叫すると同時に、インナーと



黒タイツの双球に挟まれた結也の肉槍の穂先から噴水のように白濁が迸った。

用具室の天井に届くかと一瞬詩穂が思ったほどに高く噴き出したその濃い滴は、やがてびちゃびちゃと粘つく音を立てながらスカートをめくり上げた少女たちのお尻に、背中に降り注いでくる。腰を突き出したまま、射精と同時に軽く達してしまった二人が再びぶつと小さく震えたほどの量と温度だった。

ふうー、ふうー、と激しい射精の余韻に荒い息をつき、がっくり脱力してマットに横たわる結也のもとに、静かに詩穂が歩み寄ってくる。

「詩穂姉ちゃん」から「殿部先生」に戻ってしまったような無表情に固まるその美貌に、少年は申しわけない思いを抱きながらも、はつきりと自分の本心を口にした。

「詩穂姉ちゃん、約束、破っちゃってごめんさい。……でも、僕はやっぱり、いろんなお尻を追いかけるのをやめられないんだ。あの日からずっとたくさんのお尻を見てきた僕は、もう誰か一人のじゃない、お尻そのものが大好きになつてることがはつきり分かったから。……それで詩穂姉ちゃんが僕と付き合えないっていうんなら、それでも構わない。今度は、姉ちゃんがなんて言おうと、姉ちゃんのお尻も毎日追いかけるよ！」
めちやくちやなことを宣言する変態尻フェチ少年の言葉を聞いて、それでも女教師は無言で彼の身体を起こし、後ろ手に縛られていた両手の戒めを解いた。

「……先生？」

不思議そうに問いかける環だったが、三人が本当に驚くのはそれからだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!